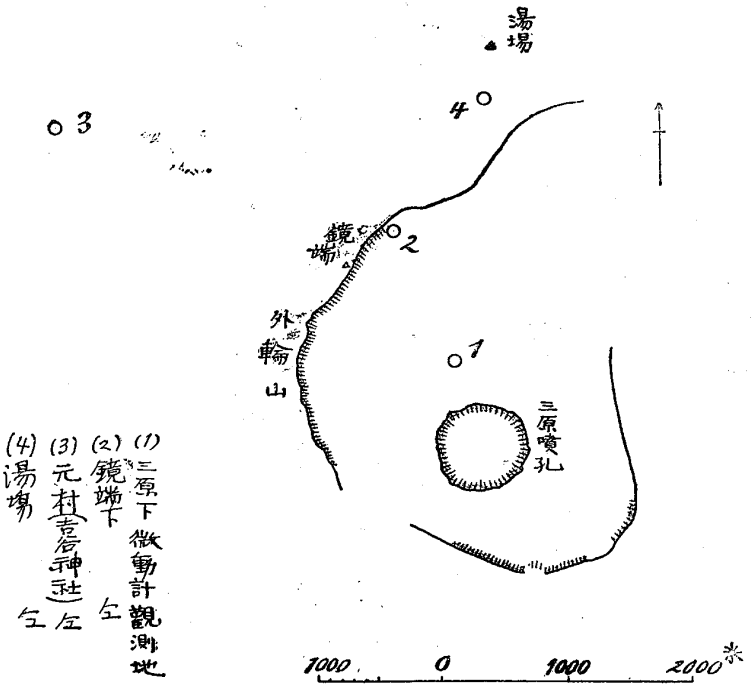
心ヨリ西北、約千六百「メートル」ヲ距テタル外輪山ノ西端ニ近キ個所ナラント想像セラル。而シテ三原中央火丘麓及鏡端下ノ微動計記象ニ於テ「縱動」トセル分、卽觀測所位置ト鎔岩噴出火口トヲ連結セル方向ノ地動ハ上ニ假定セル震動發生點ニ關シテハ共ニ實ハ連結線ニ直角ノ方向ニ近ク、卽チ横動トナルヲ以テ割合ニ小ナリシナランカ、或ハ前記縱動ハ北々西、南々東ノ震動ニシテ大島ノ長對角線ト概略同一ノ方向ニアルヲ以テ、此ノ方向ニ直角ナル震動ヨリ小ナリシヤモ知ル可ラズ。

第七十三圖

微動計觀測場所略圖



三原中央火丘ノ麓、鏡端下及ビ元村ニ於ケル地ノ震動ヲ比較スルニ、震動發生地ノ深サハ此等觀測地點間ノ距離ヨリ大ナルニアラズシテ、概略火口原沙漠平面ヨリ五六百「メートル」ノ下底ニ存在セシナルベシト想像セラル。

第十二章　結尾

四七　大島古今ノ活動ヲ比較スルニ安永噴火ノ鎔岩ハ頗ル多量ニシテ其ノ流出面積ハ約十一・五平方「キロメートル」卽チ九百七十平方町(〇・七四方里)ニシテ大島全島面積ノ八分ノ一ニ相當セリ、大正三年櫻島大噴火ノトキ流出セル鎔岩ノ總面積約二千平方町ニ比スレバ二分一ニ過ギズト雖ドモ、櫻島鎔岩ハ小山體ノ山麓ニ近キ個所ニ發セルニ反シ、大島鎔岩ハ大ナル山體(海底ヨリ起算シテ)ノ頂上ヨリ流出シタルハ、噴火ノ勢力頗ル盛ナルヲ示スモノトス。安永大噴火ハ一年四ケ月間繼續セシガ最初ノ八ケ月間ハ鎔岩ヲ孔外ニ流出セシメザリキ、今回ノ噴火ハ明治四十五年二月下旬ヨリ大正三年五月迄二年三ケ月間繼續セシガ、安永破裂ヨリハ勢力稍〻弱ク、遂ニ鎔岩ノ孔外ニ溢ルヽコトナクシテ止ミタリ。其ノ噴火中ノ首要ナル三活動時期ノ長サ及ビ孔底鎔岩層增加ノ厚サハ

	（繼續時日）	（孔底ニ流出セル鎔岩ノ厚サ）
第一期	約九十二日	百十尺
第二期	四十三日	百尺
第三期	約十一日	九十六尺

ニシテ毎活動期ニ孔底ニ流出セル鎔岩層ノ厚サハ殆ド互ニ相等シク常ニ百尺内外ナリキ、但シ第一期噴火後ノ噴孔底陷落部ハ第二期鎔岩ノ爲メニ埋メラレ、同ジク第二期噴火後ノ噴孔底陷落部ハ第三期鎔岩ノ爲メニ埋メラレタレバ、結局第一期、第二期、第三期ニ孔底ニ流出セル鎔岩ノ容積ハ概略十ト十五ト二十トノ比ニアリ、故ニ上記三期ニ於ケル孔底鎔岩ノ堆積セル平均一日ノ量ハ

	一日ニ付キ
第一期（四月一日ヨリ以後ノ分）	一尺七寸
第二期	三尺五寸
第三期	約十八尺

ニシテ第一、第二、第三期ノ噴火繼續日數ハ順次ニ短縮セラレテ殆ド八ト四ト一トノ比ニアリテ、第三期ハ最モ短カヽリシニ關セズ孔底ニ鎔岩ガ流出若クハ拋射セラレテ堆積スル日々ノ量ハ一ト二ト十トノ比ニアリ、即チ第三期ニ於テ鎔岩噴出ノ盛ナリシハ、第一期ノ分ニ十倍セリト見做シ得ベキナリ、而シテ第三期噴火ヲ以テ今回ノ活動ハ終リタリト考ヘラル。

大島ノ噴火ハ非爆發的ナルヲ以テ山麓諸村落ニ危害ヲ及ボス所無ク、事實上噴火調査ノ爲メ單純ナル好材料ヲ與ヘタリト謂フベシ。

（大正四年二月認）

第七十一圖　伊豆大島三原山火口丘ノ麓ニテ觀測セル
噴火性微動（明治四十五年四月十四日）

→

（終）

縦動

（短キ白ノ横點ハ時記ニシテ其ノ順次ノ水平距離ハ一分ナリ）

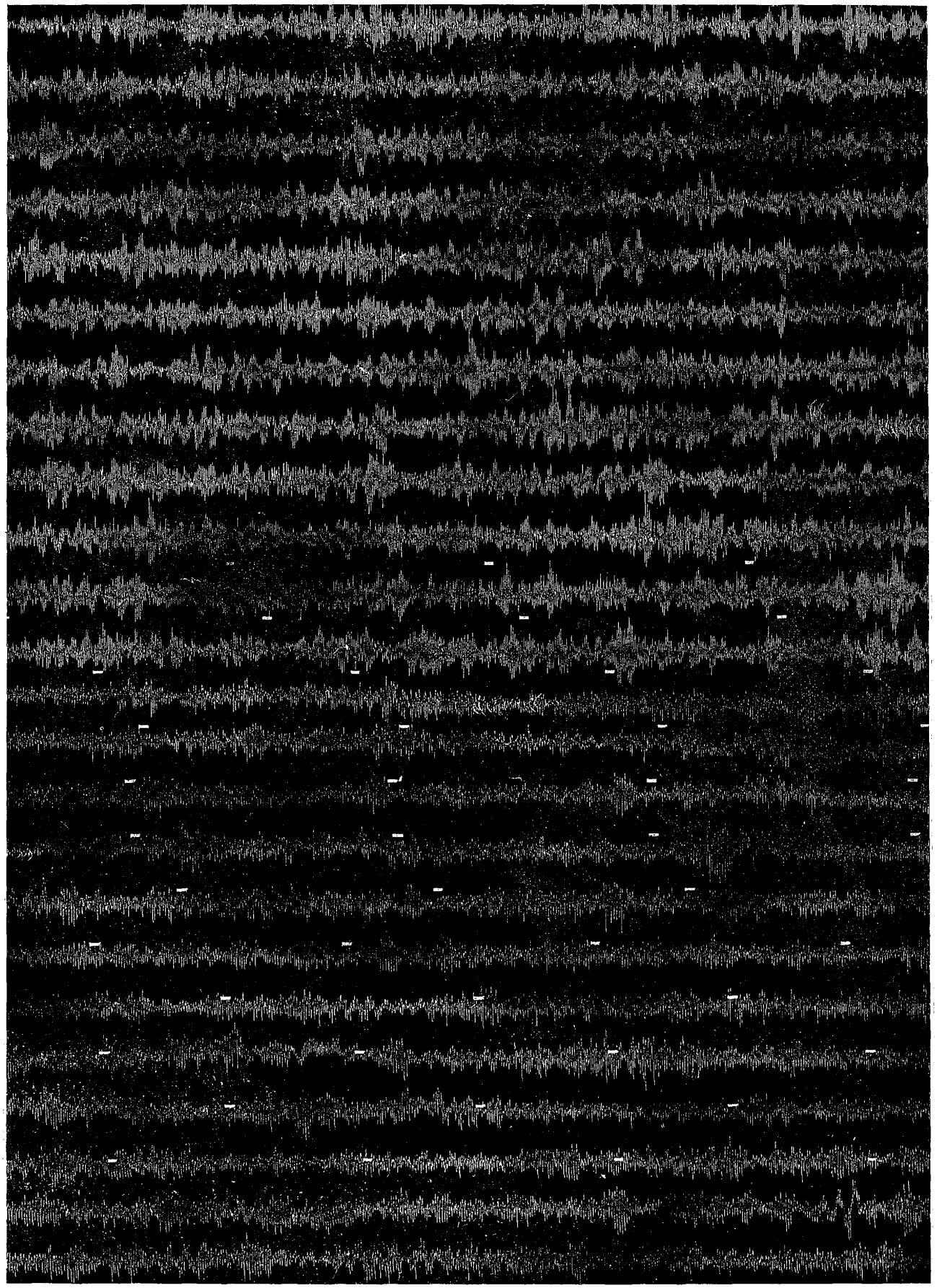
横動

（始）

水平動　實動ノ百倍

第七十二圖　伊豆大島三原山ノ外輪山字鏡端ニテ觀測セル
噴火性微動　明治四十年五月四日

（終）



縱動

…

横動

短キ白ノ横點ハ時記ニシテ其ノ順次ノ水平距離ハ一分ナリ

→　（始）

水平動　實動ノ百倍